

陶磁文化を考える

Examination into culture of ceramic

仲野泰裕

(愛知県陶磁美術館 副館長)

Yasuhiro Nakano

概要

陶磁分野の研究は、美術史的側面からの研究が先行し、考古学的、歴史学的、産業史的視点などが加わり、研究が深められてきた。ここでは、これらの学究的な側面からだけでは無く、文化としての陶磁に関する現況を再認識、再考することにより、陶磁文化のさらなる発展への展望について考えるものである。

1. はじめに

人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果を「文化」(註1)と呼ぶとすれば今から約二万年前に、「土」を焼くことにより「土器」が誕生(註2)したことは、まさに「陶磁文化」の始まりといえる。「土」を焼くことにより、生み出された「やきもの」は、原始時代から現代に至るまで世界中の人々の生活に最も身近で不可欠なものとして、暮らしと産業を支えてきた。まさに人として豊かになってゆく活動を担ってきたのである。同時に、「やきもの」の特徴である、豊かな造形美と文様と程良い重さからくる存在感。さらに土や釉薬の多彩な色や輝きなどは、我々の美的感性や創造性を刺激し、精神性を高めると共に、現在も多くの芸術作品を生み出し続けている。

1 日本陶磁の流れのなかで

(1) 日本独自の「やきものづくり」

わが国においては、約16,000年前に始まるとされる縄文土器の焼成以降、時代ごとに登場する「やきもの」が、幅広い階層と生活に直結する諸分野へ、くまなく行き渡ることにより、少なくとも一日何度かは「やきもの」と接する機会のある状況が常態化している。これにより、のちに述べるような「やきもの」のもつ本質的な特徴が、日本人の精神性の形成(日本人の心)に、強く影響を与えながら現在に至っていることは、ヨーロッパを始めとする他の地域(註3)には、認められない独自の傾向である。

さらに日本には、文明の十字路と言われる大陸の中央部のようなにぎわいは無いものの、アジア大陸の東の果てに位置していることから、長年の間に多くの文化が流入して留まっ

ている。そしてその中から多くの文化的な成果物を選択すると同時に、それぞれの純粹さだけを求めるのではなく、曖昧さを残したまま混ざりあい(註4)、ゆっくりと時間をかけて熟成させることにより、日本独特の文化が形成されてきた。「やきもの」では、中国や韓国のやきものを範としながらも、それぞれに独自性を示してきた古代の灰釉陶器、中世の古瀬戸と備前などの焼締陶、桃山期に登場する、黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部などがその好例である。

さらに、愛知(尾張・三河)地域は、古代・中世より現代に至るまで、日本を代表する窯業生産地であり、その節目ごとに中国や韓国などの技術・意匠を導入しながらも、日本独自の「やきものづくり」を発展させてきた。まさに「ものづくり」の原点としての「やきもの」を作る人々によってつくられた独自の「やきもののまち」(註5)を形成してきた。さらに「やきもの」のもつ耐熱性・耐食性・絶縁性・半導体性・生体親和性などの特性を生かし、情報通信、精密機械、医療などの、幅広い分野において利用される高性能セラミックスが開発され、我々の直接目に触れない分野においても重要な位置を占めるようになっていく。このように、縄文土器の焼成以降、日本の国土の一部である陶土を成形して焼くことにより、一つ一つ生み出された「やきもの」は、まさに日本の分身そのものであり、その素材感に内包された「陶磁文化」を培うと共に、永く世界に向けて発信し続けてきたのである。

(2) 日本人と「やきもの」

日常と伝統の中で

日本人と「やきもの」との独特の関係を示すものとして「飯茶碗」がある。近年、パン食が多くなったとはいえ、最も身近な「やきもの」の一つである。「飯茶碗」などを「手に持って使う」、さらに多くは「個人持ちの器」であるという習慣は、日本における「陶磁文化」の最大の特徴である。これは、一部の例外(註6)を除けば、中国・朝鮮・ヨーロッパにも認められない。日本人は、手に持つあるいは時には口をつけるなど、五感を通して「やきもの」と日々接してきた。また口にする時は、手に持つ、手をそえるのが原則であり、これを怠ると「犬食い」はいけないとたしなめられたものである。我々は、このように日々、肌触り・重さ・色・文様・形などを自然に記憶・認識しているはずである。愛用している茶碗が替わった時など、言葉では表現しにくい違和感を覚えた経験は誰にもあるだろう。「やきもの」と常に接する日々を積み重ねてきた日本人は、あまりにも身近であるが故に「やきもの」の感覚を意識することが少なくなっているのではないだろうか。一時期、合成樹脂製の食器の流行した頃を思い浮かべながら、あらためて日々の生活をふり返り、感性を呼び醒まし、「やきもの」と接する愉しみを、はっきりと認識してもらいたい。かつて、「出前陶磁講座」(註7)を実施するなど、「やきもの」の話をする機会ごとに、男性であれば、せめてネクタイを選ぶぐらいの感性で飯茶碗を選んで欲しい。他人まかせにしないで・・・

季節ごとに変えるのもいかがですか。日々の生活に直接つながるものであるから、是非ささやかな拘りを持っていただきたいと、お話ししてきた。

一方で「やきもの」は、茶の湯、いけ花、煎茶、香、書(文房具)、盆栽(註8)など、日本の伝統的な文化の中にも、重要な位置を占めて息づいているのも周知の事実である。これも、他の地域に認められない文化現象であり、茶の湯などが国際的な評価を受けているのは、よく知られている。また、中国宋代(?)に発し、日本において大きく発展した盆栽も、近年はイタリア、スペインなどにおいて、インテリア小物として人気が高く、日常の生活空間に存在感を増している。さらにミラノでは、ボンサイ博物館やボンサイ大学が知られるほどである(註9)。これもやはり「やきもの」の盆器が無ければ成立しない文化である。また近年、伝統ある盆栽店では、海外からの研修生と巡り合うのも珍しくないという。

磁器の創始

このように「やきもの」が急速に身近なものとなっていく大きな要因として、歴史的には、肥前有田における磁器の創始を掲げることができる。江戸時代前期のことで、諸街道の整備、経済活動の活発化などと相まって、白くて硬い「やきもの」である磁器は、食器を中心に全国に供給されるようになった。また、当初、磁器の焼けなかった京焼においても、有田とほぼ同じ17世紀中頃に、上絵付技術を導入することにより、他の磁器を焼けない窯業地とは異なる、高級陶器生産の道を拓いている。

しかしこれに続く18世紀以降については、美術史的視点が主流であった近世陶磁研究においてエアポケット状態であった。この領域に新たな方向性を示すきっかけとなったのが、長野・群馬両県にまたがる活火山である浅間山(註10)の噴火(天明三年・1783)に伴う火山灰、火砕流、泥流などにより埋没した遺跡群の発掘調査であった。それは日本のポンペイといわれる鎌原村(群馬県)や甚大な被害をうけた吾妻川流域の村々などである。鎌原村では、厚さ5m前後の火砕流に埋まっており、当時の総人口597人中、466人が犠牲となった。吾妻川の下流域利根川との合流地点に近い、群馬県渋川市中村遺跡では、総人口418人中、犠牲者は20人に人的被害は減っているものの、村高317石の内245石に相当する田畑が厚さ3~3.5mに及ぶ泥流によって耕作不能となっている。このような火砕流・泥流などの下層から出土する資料は、厚い泥流層などに覆われていたことにより、当時の状況を、そのまま伝えてくれる貴重な資料として注目され、各方面からの研究が進められ(註11)、18世紀代後半の研究の足掛かりとなった。さらに、富士山の宝永四年(1707)の噴火に伴う火山灰は、江戸城下に広く降り積もっており、同様に18世紀代の前半の調査研究に新たな指針を示した。

一方、京焼のように大きな変革を経ることのできなかつた磁器を焼くことのできない多くの窯業地では、陶器生産に終始しているものの、それぞれの窯業地の特色を出す一方で、

磁器製品としては流通しにくい器種、例えば比較的重い、大きいなど広域の流通に不向きな器種や、付加価値の認めにくいものなどに活路を拓いている。具体的には徳利、大鉢、壺・甕などである。さらに本来、木製品や金属器などであった素材を、「やきもの」に置き換えるような生産活動が進められることにより、「やきもの」素材の守備範囲が徐々に広がってゆくこととなった。

またこのような展開は、絵画史料の整理・集約などの成果からも示すことができる。食器、貯蔵・運搬用具、喫茶・喫煙具、神仏具、灯具、植木鉢など、ありとあらゆる分野において、描写が認められ、「やきもの」と共にある日常を、ビジュアル的に読み取ることができる（註12）。同時に瀬戸や有田などの基軸となる近世窯跡の発掘調査などと共に、年代的な位置づけなどが総合的に研究され、当時の生活の再現などが進められるようになっていく。

瀬戸村の試み

江戸時代の瀬戸地方では、赤津村、下品野村、瀬戸村、水野村、半田川村などを中心に窯業生産が行われていたが、他の磁器の焼けない窯業地と同様に、産業的には苦しい時代が続いていた。その中で、瀬戸村を中心に新たな試みが重ねられていたことがわかってきている。それは、『尾張名所図会』編纂の際の調査記録とされる史料「春日井」に認めることができる。そこには、碗類を中心に「御むろ」「腰鎗小服」「黒利久」「せんじ」「小半（こなから）」「廣東」「長の」「う寿茶」などが図示（註13）されている。磁器碗、京・信楽碗等に対抗するもので、瀬戸村の窯跡の発掘調査により、これらのものの一部は17世紀末から、18世紀初頭にはすでに生産が開始されていたことがわかってきている。さらに安永頃（1772-81、註14）には、呂宋（ルス）釉製品が登場している。透明感のある安定した発色の緑釉で、碗から火入、瓶掛、水盤、植木鉢に至る多器種であり、多くは貼り付け文や印花文を伴う。これらは、当時を代表する浮世絵師喜多川歌麿も注目しており、美人画などに好んで描きこむほど（註15）斬新な色彩と意匠であった。このような積み重ねにより、商圈を維持拡大し、生産地としての地力を蓄えており、これらのエネルギーは、陶石を産出しない瀬戸における磁器焼成への試験研究に注がれたものと考えられる。磁器を焼く丸窯の開発を始めとし、後に磁祖とされる加藤民吉は肥前へ、民吉の兄にあたる吉右衛門は、京都において磁器を創始した奥田穎川（17 註16）の元に赴くなど、通常地域交流と人脈を超えた大掛かりなものであった。これにより、瀬戸においても、19世紀初頭には磁器焼成に成功したとされる。

また瀬戸村において磁器生産が安定すると、呂宋（ルス）釉製品に用いられた型成形技術による貼り付け文が、新しい花形となる瑠璃釉製品に応用されている。文様部分を白磁仕上げとし、他を瑠璃釉で埋め尽くすものであった。当時、瑠璃釉にふんだんに用いられた呉須の大半は中国から輸入されたもので、大変な貴重品であった。このため当初は献上品や御用品など限られた階層へ供給された優品が中心であったが、やがて火入れや植木鉢

(註17) などその領域を広げている。当時は、山水、花鳥風月などの染付文が主流であり、その対局的な意匠であった。

このように、磁器を焼造する技術が拡大してゆくとともに、従来の陶器生産もさらにその存在領域を広げている。このようにして「やきもの」が、ありとあらゆる分野で利用され、急速に我々の身近なものになっている。そしてその中心となった時期は江戸時代であったことがわかる。まさに『浮世床』(文化十年～文政六年、1813～23)などに描かれた日常—お神酒徳利、台所用具、食器、植木鉢・・・などと共にある生活は、日本のごく普通の光景となった。

(3) 「割れる」ということ

「やきもの」には「割れる」という特徴がある。これは一般に負の要素としてとらえられがちであるが、はたしてそうであろうか。わが国は、歴史的に農耕中心社会であり、現在も都市部や一部地域を除き、稲作を中心とする二毛作が一般的である。このため長期にわたる定住生活の基本(註18)である。しかもあまり広くない国土において、民族が亡ぶほどの戦乱や、宗教や言語、姓名の改変を余儀なくされるような外圧を受ける事も無く、今日に至っている。これは、世界的にみても唯一と言えるぐらいの例外的な事象・地域でもある。

一方、日本は、アジアの東の果て東海に浮かぶ島国である。南北に長いとはいえ、黒潮(日本海流)の影響もあり、緯度に比較して温暖な四季の流れのなかで、日本人の繊細な感性が磨かれてきた。気候の変動を示す海進(温暖化)・海退(寒冷化)の歴史はあるものの、おおむね安定した四季の恵みある気候の中において、おおらかに日本の文化が形成されてきた。このような定住性の強い、恵まれた気候風土のなかで、ゆっくりと時間をかけて培われてきた日本の「やきもの」には、ひんやりとした肌触り、色、ずっしりとした重みなどからくる素材感がある。同時に、「割れる」という不確かな要素のある「やきもの」を、日本人は身近に用い、共に永く暮らしてきた。しかも、すでに述べたように、茶碗・皿・小鉢から盆器(植木鉢)に至るまで、ありとあらゆる分野において「やきもの」に囲まれる状況で現在に至っている。このため日本人は、「やきもの」が割れるゆえに、むしろこれらを大切に扱う扱い方、おだやかに品物(物事)と接する接し方などを体験的に身につけてきたといえる。また、大切にしたいがゆえに吸湿性が少なく耐火性のある桐箱に収めるなど、独自の収納文化(註19)を発展させてきた。さらに素材は異なるが、風呂敷、袱紗、仕覆などを用いて大切に包む文化など類似の例がある。一方で、漆や鍍(かすがい)、鉛ガラスなどによる修復技術も習得した。また修復は、単に器としての機能を復元するだけに留まらず、修復箇所を「けしき」として鑑賞の対象としている。繰り返しになるが、戦乱に明け暮れる紛争地域や、放牧など、常に移動生活を余儀なくされる状況とは異なる、農耕を中心とする定住生活であるがゆえに、扱いが悪ければ割れてしまうという不確かな

要素をもつ「やきもの」を、永きにわたり身近に置く生活を可能としたのである。このような積み重ねにより、「やきもの」のもつ「割れる」という特徴が、「ものを大切にする」「ものへのこだわり」という日本人独特の国民性が培われる上で、大きな役割を担ってきたといえるのである。

これは、陶磁資料館（現・陶磁美術館）のボランティアの方からお聞きした話であるが、ご主人がアフリカ駐在時代に現地の人々が、あまりにも物を大切にしない（執着がない）ので、日本から「やきもの」の器を送ったというお話を聞いたことがある。今思えば、その時に思いが至らなかった恥ずかしさを感じ入るばかりである。

2 陶磁文化の発展を目指して

(1) 陶磁文化を次世代へ

近年、お茶はペットボトル入りのものを買うのが普通という現象の日常化により、急須を知らない母親が増えているという（註20）。これはかなり深刻な状況となっており、さるクイズ番組で、朱泥の急須の写真を見て、急須という答えが出てこない状況にまで至っている。さらに別の番組では、土瓶と急須を取り違えて紹介している例がある。急須に茶葉を入れ、適温のお湯を注いだ後に、ゆっくりと茶葉の開いてゆく時を愉しみ、湯呑み茶碗に注ぎ分けられたお茶から生まれる香り・色・味わいを愉しむということが失われようとしている。この「お茶を愉しむ」という場面には、「やきもの」である急須と湯呑み茶碗や菓子皿（鉢、銘々皿）などが登場する。その場としての家庭や職場においては、湯呑み茶碗は個人持ちの例が多く、その場の話題の一つにもなりうる。つまり「やきもの」を介して「お茶を飲む」ということにより、お茶の味わいを一層引き立てるだけでは無く、やわらいだ時を過ごし、家族またはそのグループの交流を深め、ゆとりと癒しの時間を生み出すことができるのである。ここでも「やきもの」が重要な役割を担っていることがわかる。このように、日本では日々の生活の一瞬一瞬に「やきもの」が深くかかわることにより、共に発展をとげてきた。しかしながら、コンビニのプラスチック容器や、外食チェーンの画一化された食器類など、器としての「やきもの」の存在が稀薄になる傾向が急速に進んでいる。ものに対する愛着が薄れ、大切にするという思考が崩れ、かつて使い捨てが美德のように言われた。このような流れに拍車を掛ける傾向にあるのが、食品を中心に日常雑貨を含め、便利・簡便さを売りものとする、コンビニエンス・ストアの普及である。時流とはいうものの、コンビニ的発想・生活様式は、「準備をしない」「我慢をしない」という日常性を生み出しているのではないか。そして便利さの名の元に規格化・省力化が進んでおり、このような現象が現代人の精神面に与える影響は少なくないと考えられる。

一方、スーパーマーケットなどの、主に食品売り場のプラスチックトレーに、染付や赤絵、織部風のプリントが施されているのを見ると微笑ましく、日本らしさを感じるが、それだけに譲れない素材感が「ホンモノ」には認められる。重い、割れるとはいうものの、日本

人の深層には、「やきもの」のもつ優位性がまだ生きていたともいえる。

(2) 「やきもの」を愉しむ

現代に生きる我々の生活の中で「やきもの」を愉しむ機会は、決して少なくは無い。すでに日常のなかでの「やきもの」の存在については述べてきたが、美術館などにおいて展示物として鑑賞するのを初めとして、古美術としての「やきもの」の収集や鑑賞は古くから認められることである。

一方で縄文土器や埴輪などのもつ芸術性に触発され、新たな境地を開いた芸術家も多く知られている。さらに近代以降は、「土」のもつ特性である造形力を発揮しやすい可塑性や、土味、釉薬・彩料などの生み出す色彩などが、表現力を高めてくれる素材として注目されると共に、創作領域を限りなく拡大している。伝統分野に発し現代アートに至る幅広い分野において、創作活動が盛んである。このような、芸術作品としての制作と鑑賞なども、日本人の精神性を高めてゆく要素として極めて重要である。そして、良いものを良いと言える人、良いものを見落とさない人、「やきもの」を評価できる人を育てることが急務である。

一方で、陶芸教室などにおいて、この世に一つしか無い作品を制作し、自作を使う愉しみが新たな要素として加わっている。これは、子どもから大人まで、容易に体験することが可能であり、近年急速に人気が高まり、各所に陶芸教室が誕生するなど注目を集めるようになってきている。さらに、「土」に触れ、屈託なく戯れる感覚は、体を使った遊びの一つとしても注目を集めている。大人はどうしても、焼き上がった作品にこだわりがちである。しかし、すでに身近に雑木林や野原は無く、「どろんこ」「落とし穴」「たき火」「氷割り」などの屋外での活動機会を失いつつある子どもたちには、「土」に触れることは貴重な体験となっている。「土」には、自由に扱える反面、数々の制約もあるが、手を使って形を作ることにより、子ども達の癒しとなると共にその感性と想像力をかき立て、新たな創造性を生み出すことに繋がっている。

(3) 陶磁文化の発展を目指して

日本人は、比較的恵まれた気候風土のなかで、永く四季の移ろいを繊細な感性で受け止め、その精神性を高めてきた。同時にその深層部分で強くかかわってきたのが、すでに述べてきた日本独自の「陶磁文化」である。利便性重視の流れのなかで「やきもの」離れの進む現状であるが、日本人の精神性の形成に大きくかかわってきた「陶磁文化」を、「そんな時代もあった」というような、文字や映像にだけ残る、教科書的な歴史の世界に追いやることだけは、防ぎ止めることが必要である。このためにも、小・中学校の教員、児童・生徒、一般などターゲットを絞り込んだ、美術館・博物館活動の一環としての陶磁講座や体験型ワークショップなどの計画的・継続的な実施などにより、「用」「鑑賞」「制作」など、「や

きもの」と共にある生活のすばらしさへの理解を、深めると共に、意識向上を図ってゆくことが急務である。しかし、このような活動にも、現役の大学生に聞けば、確かに小学校時代に学校行事として博物館を見学した記憶はあるが、中・高への繋がりが無いという。博学連携の名のもとミュージアムエデュケーターの必要性が叫ばれているものの、人員・予算の着いていけない現状である。

また一方で、2011年に「陶磁文化」と密接な関係にある「日本食文化」を世界遺産にという提唱(注21)があり、これに呼応して「京料理・会席料理」を京都府指定無形文化財とすることが決まった。また京都市、佐賀県などの各地で「乾杯条例」(注22)が制定されており、常滑市の条例の条文には「常滑焼の器で地酒を飲むことを広める努力をする」とある。「マイぐいのみ作り」のイベントなどが実施されており、これらと連携されるなど、今後の動向に注目していきたい。さらに2013年に「和食 日本伝統的な食文化」がユネスコ(国連教育科学文化機関)の無形文化遺産に登録されることとなった(注23)。しかし一方では「喜ぶというより、崩壊が進む日本の食文化を見直すきっかけにすべきだ」(注24)という指摘がされている現状である。

金属のナイフやホーク、スプーンなどを直接「やきもの」にふれさせる西欧の食文化とは、根本的に異なるもので、漆器と「やきもの」の調和する日本の食文化を大切にしたいものである。

「陶磁文化」の発展のため、陶磁専門館の学芸員として微力ながら努めてきたが、大きな流れに、逆行する昨今である。一面に広がる蓮華草畑や実りの麦畑 - 麦秋など日本のすばらしい四季の一ページを体験的に知らず、直接火を扱った事も無いまま成長した社会人が、大勢を占めつつある現状において、ワークショップ、講演会、講座など、知識の切り売りの催事にも限界があり、「陶磁文化」の普及発展への試みにもいささか梃摺っている次第である。

かつて講演後の質問として、食器の無文化、画一化の要因の一つとして「食洗機が脅威である」という私の説明に対して、食洗機に耐えるものを作るのが産業ではないかという意見が出されました。しかし、本当にそうだろうか・・確かに産業は常に新しいものを生み出し古いものは切り捨ててきました・・規格化された形・文様、割れにくい器を求めらるのであれば、樹脂や軽金属などの他素材が向いていることは明白である。「やきもの」の特徴がゆえに、日本文化を培う上で果たしてきた重要な役割を放棄することとなるのではないか。「やきもの」は、歴史と文化の結実であるが、日々の身近な道具としての一面ももっており、永く培ってきたことを、使いよさだけを求めて損ないたくはないものである。幸い、CBCラジオの「大人のたしなみ講座」のテーマとして「やきもの」を取り上げていただき、「やきものを愉しむ」など4回に分けて放送していただいた。また、地元FM局であるラジオサンキューにおいて、筆者とパーソナリティーとのやきもの談義「い

ろはにやきもの」という、コーナーをスタート（5月6日）することができることになった。「やきもの」は、その分野にとどまらず、自然、文化、経済、政治から身の回りまで、すべてに関連しており、肩の凝らない内容を提供しながら「やきもの」文化にも少し親しんでもらおうというもので、リスナーとのやり取りも楽しみである。決して急速にとはいかないが、若干知識と経験のある一市民として、今後も陶磁文化の素晴らしさについて考えてゆければと思う。

なお、本稿は、NPO やきもの文化と芸術振興協会主催退職記念講演会「やきものとともに16,000年 やきものの魅力と文化的な意義」（於・愛知県陶磁美術館 2014.03.16.）の発表内容に一部重複する。

註

- 1 「文化」についての一般的な解釈。文化 culture 人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。culture 語源はフランス語系のラテン語カルティベイティブ 耕し豊かになる — 文化とは人を耕し豊かになってゆく活動の総称。
- 2 我々の学生時代は八千年から一万年前というのが定説であったが、近年、年代測定技術の進歩と調査区域の拡大により、中国で一万年八千年前という報告が知られるようになってきている。
- 3 ヨーロッパにおいても、マイセンやセーブルのように高級食器の生産が知られているが、質の高い「やきもの」は、一部の王侯貴族にしか手にすることができなかった。また、金属製のナイフなどが、直接「やきもの」と接する食文化とは、「やきもの」に対する意識が異なる。
- 4 文化的な曖昧さ 例えば神仏習合。一般家庭に、仏壇と神棚が共存するようなことは、他の地域では存在しない。
- 5 「やきものまち」 煙突のあるまち。やきものを作るまち。やきものを買えるまち。やきものを鑑賞できるまち。やきものをつくれるまち。その代表が瀬戸であり、あらゆる窯業技術を修得しており、陶器と磁器を共に生産する窯業地としても例が無い。
- 6 茶碗を手を持つ 中国・雲南省に茶碗を手を持つ民族。中国・韓国でも茶碗を全く手にしないわけではない。
- 7 愛知県陶磁資料館「出前陶磁講座」。平成17年度より、5館前後の協力館へ出向いて実施。同20年度以降、総合テーマ「やきもの文化を語る」に基づき各年度ごとにサブテーマを設けて実施。
- 8 盆栽文化の広さと深さ
- 9 白幡洋三郎「盆栽」『知らなきゃ恥ずかしい日本文化』ワニブックス 2010.08.22.
- 10 信濃・上野両国にまたがる三重式の活火山。標高2568メートル
- 11 児玉幸多『天明3年(1783)浅間山大噴火による埋没村落(鎌原村)の発掘調査』学習院大学 1982。大石慎三郎『天明三年浅間大噴火』角川選書174 角川書店 1986。仲野泰裕「中村遺跡出土の近世陶磁」中村遺跡 渋川市教育委員会 1986。仲野泰裕「浅間山の大噴火(天明三年)に伴う泥流層下の

瀬戸美濃陶器」愛知県陶磁資料館研究紀要5 1986。

12 仲野泰裕「文献・絵画史料にみる陶磁製品の動向」美濃の古陶3 美濃古窯研究会 1989。

13 仲野泰裕「近世瀬戸窯の諸相 ー京・信楽焼と対峙する視点からー」「近世信楽焼をめぐって」関西陶磁史研究会 2001。

14 安永二年(1873)・他の墨書銘を伴う瓶掛が知られる。

15 絹本「三美人図」、「美人納涼図」他。仲野泰裕「江戸時代後期の本業」図録「江戸時代後期本業展」瀬戸市文化センター 1988、等で紹介。

16 吉右衛門は穎溪と号す。奥田穎川が瀬戸に来たという説もある。

17 瑠璃釉白抜葵貼付文巾着型鉢・他、「尾張藩上屋敷跡遺跡V」東京都埋蔵文化財センター 2000。

18 定住性 日本では農耕を主とした定住生活が基本である。遊牧民族 遊牧しながら、季節的・周期的に移動する民族。移住生活が前提であり、やきものの位置付けは、農耕民族とは大きく異なる。

19 木箱に収納 ものを大切に日本の収納文化。箱詰めにより、器物の破損を防ぐ。桐製であれば、材質は軽軟で、耐火性が有り、吸湿性が少ない。さらに、風呂敷、紙などによる包装文化もまた特徴的。

20 「急須で茶入れる慣習消える？」朝日新聞 朝刊 投書欄 2009.05.23。「急須離れ進む」京ねこニュース 2012.02.05。「茶(PDF:417KB)」農林水産省

21 「世界遺産・日本食文化 申請へ 農水省定義づけ急ぐ」朝日新聞 朝刊 2011.07.06。「京料理初の文化財に」中日新聞 朝刊 2013.03.06。

22 「『地酒で乾杯を』各地で条例」読売新聞 2013.11.01。

23 藤井裕介「和食 無形文化遺産に決定」朝日新聞朝刊 2013.12.05。

「新鮮で多様な食材とその持ち味の尊重・栄養バランスに優れた健康的な食生活・自然の美しさや季節の移ろいの表現・正月行事など年中行事との密接な関わり」がアピールされ、「自然の尊重という日本人の精神を体現する社会的慣習」として登録。

24 安達一正「和食の危機」『にじ』毎日新聞朝刊 2014.01.14。